58.8.13

朝日（秋田版）

愛の一粒運動

今年は全県対象に

ソマリアへ　来月上旬実施

目標30㌧、輸送費も

食糧危機に悩むアフリカ・ソマリア民主共和国に秋田米を送ろう、と昨年始められた「愛の一粒運動」（日本ユニセフ協会秋田友の会主催）が、今年も来月一日から一週間行われる。昨年は県央中心だが、今年は全県下の小、中学校が対象で、今月十四日からは写真展、映画上映など「アジア・アフリカフェスティバル」も催され、運動の輪は着実に広がってきた。

あすから秋田で写真展・映画会

ユニセフによると、アフリカ大陸では数千万人が深刻な食糧と水不足に苦しみ、なかでも、ソマリアでは国境紛争の結果二百万人近い難民が流入、干ばつも加わって多くの人々が極度の栄養不良に見舞われているという。

「愛の一粒運動」は県民から米を少しずつ集めてソマリアに送ろうという試み。昨年は九月一日から一週間、秋田市、仙北郡などの小、中学校に呼びかけ、約八・五㌧を送り、今年の目標は三十㌧で、ソマリアへの輸送費の寄付も募っている。

この子らに愛の一粒を＝アフリカ写真展パネルから

写真展は飢えに苦しむアフリカの子供らの姿を中心にした二十三点の写真のほか、地図なども展示。人口問題、国境紛争など、難民や飢餓を生み出す政治的、社会的背景をわかりやすく伝える。映画はインド、フィリピン、スリランカでいまも残る古い身分制度、宗教問題などを主題に、日本とは異なるアジア諸国の現状を考えさせる作品。

友の会代表の佐々木正光さん（三三）は「単に米集めだけではだめ。一方的援助ではお互いの間に誤解も生じる。運動を通じてアジア、アフリカがいま、どんな問題に直面しているか考えてもらいたい」といっている。

アジア・アフリカフェスティバルは写真展が十四日から二十一日まで秋田市の県児童会館（十五日は休館日）。映画は二十、二十一の両日、やはり児童会館で催される。入場無料。問い合わせは仙北郡西仙北町刈和野二五、佐々木興業内「日本ユニセフ協会秋田友の会」（〇一八七七―五―二六二六）。

NO.9

毎日新聞

羽後週評

愛の一粒運動

「国民生活に関する意識調査」によると国民の中に中流意識がすっかり定着したという。物価高や税金など心配だらけかと思ったら意外に大半の人が〝豊かな生活〟を送っている様子がうかがわれた。NHKの朝のドラマ「おしん」では米がなくて「ダイコンめし」を食べたり、戦争中にわれわれがスイトンを食べて空腹をしのいだことを考えると、思いもよらない飽食の時代。

現代っ子にモノ不足を説明しても理解できない。「ご飯を残すのはもったいない」と大人たちが叱っても子供たちは納得できないはずだ。満腹のときには飢餓（きが）に苦しむ人たちの気持ちがわからないと思っていたが、いまアフリカ難民に米を贈る「愛の一粒運動」が県内で燎（りょう）原の火のように燃え立っている。

昨年夏、毎日新聞秋田支局へ「ソマリアに秋田米を送る運動を起こすんだ」と二人の青年が訪ねて来た。日本ユニセフ協会秋田友の会代表の佐々木正光さん(三三)たちだった。

運動のきっかけはソマリア難民の窮状を伝える新聞報道と写真だった。空腹のあまり倒れるはだかの子供たち。わずかな食糧をもらおうと必死に手を差し出す難民たちの姿を見て「自分たちの力で何かできることはないか」と立ち上がったということだった。

「一握りの米を」という青年たちのアピールが県下に広がり、昨年八・四㌧が集まった。船会社の好意もあって無料でソマリアの首都モガジシまで運んだあと国連のWFP（世界食糧計画）の手で難民キャンプに送られた。

ことしも救援の手が県内各地から寄せられている。県内の小中学校や公民館に置かれた収集段ボールには一握りの米が続々集まり、八日、秋田市・中央公民館で行われた袋詰めでは麻袋に六・六㌧の米が詰められた。十二日には西仙北町中央公民館で袋詰めされるが昨年の二倍にのぼる善意の米が集まりそうだ。

今回はユニセフ友の会の呼びかけに共鳴する〝助っ人〟が出ているのも心強い。音楽グループが「ユニセフ愛の一粒、チャリティーコンサート」を開いて入場料の代わりに米を持ち寄ってもらった。反響が意外に大きく十二月にもアンコール・コンサートを予定しているという。

西仙北高では十五日の学校祭に「ユニセフ展」を開いて難民映画やアフリカ・パネル展を開くのをはじめ大曲中、湯沢商、神岡町立平和中などでも続々パネル展や映画会を開いている。

アフリカの現状を知ろうという意識が高まっているのは「一粒の米」をきっかけにユニセフ友の会の運動が実りつつあることを実証している。

しかし、佐々木さんらは、余っている米を分け与えるという意識は払しょくしたいという。同じ人間同士は全く対等であり、豊かな国に住むからといって〝おごり〟は許されない。あくまで「愛の一粒運動」は人間愛の発露だとしている。また、今回の運動を通じ一粒の米のありがたさをかみしめることも大切だという。

「愛の一粒運動」で集まった米の袋詰め作業＝8日、秋田市中央公民館で

飽食の時代に育った人たちは米を作る農家の苦労も知らずに食べている。惜し気もなく残飯を捨ててしまう。思わぬ災害にあい、外国から食糧の輸入がストップしたとき、自給率が三〇%に満たない、わが国は一体どうなるのか。「愛の一粒運動」はソマリアの難民を救うことだけでなく、モノのありがた味を教えている。

毎日新聞秋田支局長
高橋　光夫